魔術師ルカの一生

甘味蜂蜜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔術師ルカの一生

【Ｎコード】
Ｎ６３８８Ｚ

【作者名】
甘味蜂蜜

【あらすじ】
両親も友達も居ない、お金も財産も無い。唯一の味方は歳が二つ程離れた兄だけ。しかしそんな兄も昨晩かえらぬ人となってしまい、少女瑠夏（るか）は絶望の淵に立たされていた。更に少女の背中を押したのは役所の役員からの、引き取り手の居ない子供は施設に入らなければならない、という言葉。荷物をまとめた少女はアパートの隣人に全てを託して、この世を去る。享年１５歳。嗚呼、これでやっとあの世へ行ける―…。そう思いながらゆっくり瞳を開けると、なんとそこには兄と瓜二つな青髪の青年が居た……。

第一話　死神は大鎌を振り下ろす

白い白い石の前で、少女はただ一人泣き続ていた。
―死神は誰に対しても無慈悲で、ただただ自分の使命を全うするだけ。
確かどこかに書物にはそう書いてあったはずだ。そんな事を頭の隅で考えながら、少女は目の前の石に刻まれている一人の青年の名前を、ただ愛おしげに、悲しげになぞった。

「昨晩急に発作を起こして…」
「ああ…あそこの兄ちゃんは昔っから身体が弱かったからなぁ…」

少女から一歩下がった所に居る大人達はひそひそと言葉を交わす。そしてそんな大人達から一人、こちらに向かってくる大人が居た。

「…瑠夏（るか）ちゃん…」

役所の人だよ。そう声をかけてくれたのは、少女と最も親しかったアパートの隣に住む老人。役所の役員は憐れむ様な瞳で少女瑠夏の事を見つめると、深く深く頭を下げた。慈悲の意をこめて。

「君が…杉本瑠夏ちゃんでいいよね？」

役員は黒いスーツを着ていた。喪服のつもりだろうか。

「……はい、そうです」

ぽつりとそう呟くと、役員はホッとした様な笑みを浮かべる。
瑠夏はそんな役員の様子でさえ、無表情で見つめる。彼女は、変わ

ってしまったのだ。唯一の肉親である兄が死んでしまった、その日から。

「…私…施設送りですって」

幾つかの段ボールが瑠夏とその兄が借りていたアパートの一室に、無造作に置かれている。最後にと、瑠夏が何もない部屋に招待したのはあの老人はだった。

「…そうかい…ここもまた寂しくなっちゃうねぇ…」

老人はすっかりぬるくなってしまったお茶にようやく手をつける。そんな老人の動作を見ていた瑠夏は、ぽつり、ぽつりと言葉を発する。

「…この荷物、もう要らない物なのでお爺ちゃんに全て差し上げます」

「…え？」

「今までありがとうございました」

おぼつかない足取りで小さなベランダに向かって足を進める瑠夏に、老人は急いで飲んでいたお茶を勢いよくテーブルに置く。

「…は、はやまるな瑠夏ちゃん！」

「…もう、無理です」

ベランダに足をかけた状態で、瑠夏は、本当に小さな笑みを浮かべてこう言った。

「さようなら」

その瞬間、一人の少女の体は、重力に従ってそのまま下へと落下していった。

それが瑠夏の、最期の瞬間だった。

第二話　ずれていく

「…カ…ルカ……」

…自分の名前を呼ぶ、誰かの声がする…。それに気付いたのはつい先ほどの事。声の持ち主は何度も、何度も自分の名前を呼ぶ。

「…様…もうお止めに…て…」

「…でも…ルカ…なら……！」

鼻につくのは甘い香り。それは瑠夏が先ほどまで住んでいたアパートの匂いではない。ましてや病院の匂いでもない。

不思議に思ってゆっくりと瞳を開くと、そこには二人の青年が居た。二人とも目を開いた瑠夏には気付いておらず、何やら言い争いをしている様だった。

どこかのテレビにでも出てきそうな程、容姿が整っている二人に瑠夏は思わずごくりと喉をならす。

瑠夏に背を向けている二人が何を言っているのか相変わらず分からなかったが、瑠夏は二人の後ろ姿を見てふと感じる事があった。

青髪をした青年と、茶髪をした青年。

茶髪をした青年は長い髪をポニーテールにしていて彼に見覚えは無かったものの、青髪をした青年の方は、どうも…見覚えがあった。

「…瑠李（るい）…お兄…ちゃん……？」

ぴくりと。二人の会話が止み、視線がこちらに向けられる。

「…ルカ…ルカ…なのか…！？」

「…おに…ちゃ……」

こちらを振り向いた青髪をした青年は紛れもなく兄の容姿そのもので。自らが兄と呼んだ青年は、目を覚ましたばかりの瑠夏の体を力強く抱きしめた。

「っ良かった…！もう…目覚めないのかと思ってた…！！」

「…目覚め…ない……？」

「どこか体は痛むか？動かない所はあるか？」

矢継早にと投げかけられる問いに、どこか焦点の合っていない様な、そんなぼんやりとした瑠夏の思考ではついていく事ができなかった。

「…っルイ様！」

「うおお！？」

「ルカ様はまだお目覚めになったばかりですよ！全く、少しは自重してください」

「なんだよライ、兄弟の感動の再会を邪魔しやがって！そういうお前はルカが目覚めて嬉しくないのかよ！？」

「お気持ちは察しますがせめてルイ様の馬鹿力でルカ様を抱きしめないでください！ルカ様が潰れます！！」

どうやら茶髪をした青年は、眼鏡をかけていた様だ。長いポニーテールを揺らしながらそう抗議する彼に、自分が兄と呼んだ青年は不機嫌そうな顔をしながら抗議する。

二人って仲いいんだな…と思うと同時に、瑠夏はふと疑問に思った事があった。

「…お兄ちゃん」

髪の色は違えど、見た目はどう見たって兄である瑠李と同じなので、

瑠夏は青髪をした青年をとりあえず自らの兄だと判断する。

「ん？どうしたルカ！」

満面の笑みを浮かべる兄に、瑠夏は困惑した表情を浮かべてこう言った。

「…その…横に居る人は、誰？」

「え？」

茶髪をした青年にちらりと視線を向けてそういう瑠夏に、瑠李の顔からは自然と笑みが消える。

対する茶髪をした青年も、何やら今の言葉が相当精神的なショックだったらしく、今にも泣きそうな顔をいていた。

「…お前…何……言ってんだ？」

「それと…」

今度はこちらが矢継早に質問をする番。瑠夏は大きな部屋を見渡すと、兄にこう言った。

「ここは、どこなの？」

第三話　広がる戦火

「ここは、どこなの？」

目の前に居る妹は確かにそう言った。焦点の定まらない瞳で、不安の混じった声で。

「…ライ、椅子を持ってこい」

「は、はい！」

少々話がややこしくなりそうだと勘づくや否や、青髪をした青年は隣に控えている執事にすぐさま命令を下す。

「…どうぞ」

「あぁ」

普段妹が使っている椅子を拝借して、どすんと腰を下ろす。妹は忙しく辺りを見回しており、本当にここがどこだか理解できていない事が一発で分かった。

「…まず…ルカ。普通ならここで何が分かるか、誰が分かるかと問いただす所だろうが…」

それとは逆の発想。青髪をした青年はふうっと小さなため息をつくと、こう言った。

「今のお前に？分かっている事？はなんだ？」

「……」

…やけに室内の空気が重苦しい。目の前に居る妹が、必死に思考を巡らしている。

「……しか……らない……」

「え？」

ぽつりと、小さな声が桜色をした唇からは漏れる。

「悪い、もう一回言ってくれ」

「……」

どうやら先ほどの言葉はわざと声の大きさを抑えて言った物らしい。色々と考えを巡らせた後に、妹は意を決して通常の声のボリュームで、はっきりと、兄である自分にこう言った。

「…貴方が私の兄であるという事実しか、分からない」

妹の表情は非常に暗く、悲しい物だった。
だから目覚めたばかりの病人にこんな行為をしてはいけないと分かっていたものの、もう一度だけ、力強く、目の前の少女を抱きしめた。少女の体は少しでも力を加えてしまえば壊れそうなくらい、細く、小さかった。

「…本当に何も…覚えていないみたいでしたね」

カツカツと足音をならしながらだだっ広い廊下を歩く青髪をした青年ルイと、茶髪をした青年ライ。

「…なあライ…覚えているか」
「はい？」
「ここで俺とルカが…遊んだ事を。あそこの広い庭に父様と母様には内緒でブランコを作った事を。この屋敷を囲む森で、ライと俺とルカとでラズベリーを摘みに行ったあの昼下がりの事を」
「…全部覚えていますとも」
「……」

ルイは大きな溜息をつくと、その場にうずくまる。

「…あいつは今まで俺達と一緒に生きてきたルカとは、別人だ」

人は記憶、経験によって人格が大きく左右されると言う事を、ルイは誰よりも知っていた。

「…えぇ、そうですね。ですが貴方様の妹君であるという事実は、変わりありません」

ライは主人の心中を察してか、彼にしては珍しく温かさのこもった声でそう応える。

「どう接すればいいか…分かんねぇや」
「それはルカ様も同じでしょう。いえ、ルカ様の方が大きく困惑している事でしょう。貴方様の事を兄と認識しているはものの、何も……それ以外の事は知らないのですから」
「……それもそうだなぁ」

よいしょと彼の見た目からは想像できない様な、爺くさいかけ声と共に立ち上がったルイは、最早あの弱々しい表情を浮かべてはいな

かった。

「よくよく考えてみれば…そうだよなぁ。あいつは今知り合いが俺しか居ない状況とほぼ等しいんだから、心細くて当然だよな。それに比べて俺はお前みたいな優秀な人材も居れば、仲間も居るし、友も居る」

「えぇ。沢山の物を持っていらっしゃる貴方様がルカ様よりも早く音を上げてしまってどうするんですか。もっとしゃきっとしなさい」

「へいへい」

だらしなく返事をするルイに、ライは小さなため息をつく。

「…そもそも。病で臥せっているルカ様の意識を？無理矢理？浮上させようとするからこの様な事が起きるのですよ」

「っあれはだなぁ…！というかそもそも、外はこんな事になっちまってるのに、冷静でいろなんて言う方が無茶な事だろ！」

ドンっと廊下の壁を悔しそうに殴りつける主に、今度は大きなため息をつく。

窓の外を見まいと顔を背けるルイとは正反対に、ライはただただ無表情に、窓の外を見つめる。

「…国境越え…ついにしてやられましたね」

「ああ…首都に進攻してくるまでの時間稼ぎと平民の避難誘導位はできる…と踏んでいるが…」

「…？戦力？が足りないのですね」

「……」

否定しない。それ即ち肯定の意。

「ルカ…あいつは…『底なしの魔力を持つ者』だ」
「だから戦争に協力してもらおう、と。我々が行っている人殺しに加担してもらおう、と」
「っライ……！」
「事実でしょうに」
眼鏡越しの鋭い視線に言葉が詰まるライ。
「…この国を統治する自警団の長という方が、なんという弱音を」
「他に方法が無いんだ！それはお前だって分かってるだろう！」
「実の妹をほいほい戦場に出す兄が、どこに居るというのですか！そしてその結果がこれ！ルカ様の払った代償は…大きすぎますよ！」
「っ…お前、実は相当怒ってたな」
「現在系ですよ、ルイ様」
「……」
森に囲まれたこの屋敷。国境線をじわじわと侵略されている国にあるとは思えない位、屋敷には静かな時間が、ただただ続いていた。
「…ルカもあんな状態だ。戦場には出さない。この家にこもってもらう」
「外から結界をはりますか？」
「当然だ。いつここも侵略されるか分からないからな」
見慣れた階段まで距離を縮めると、すぐそこにかかっている上着を羽織り、早足で玄関にと向かう。
「ライ。ルカがこの屋敷で一人でも生活を送れる位にまで落ち着いたら、本部に戻って来い」
「了解致しました」

青髪の主が、同じく青い色をした上着を羽織るその姿は、この国では滅多にお目にかかる事の少ない自警団の長としての、高貴な姿だった。

「行ってらっしゃいませ」

「あぁ、言ってくる」

玄関の扉を開ければ、遠くからは大砲の音や鐘の音が聞こえる。ルイは自らの執事に背を向けると、そのまま振り返る事なく森の中へと、嫌、正確に言えば森を抜けた所にあるこの国の首都へと、姿を消したのだった。

第三話　広がる戦火（後書き）

次のお話では瑠夏が来てしまった世界で起こっている事や、
ルイやライの事を書いて行こうと思います。
それにしても話の進むテンポが非常に遅い…！
もう少し早く話の展開をしたいと思います。反省反省。

第四話　瑠夏とルカ

「…ねえ、ライ」
「はい、なんでしょうかルカ様」
「お兄ちゃんってどんな人なの？」

はて、と驚いた風に瑠夏の方を向くと、瑠夏は小さな笑みを浮かべていた。
太陽の光が降り注ぐ午後の昼下がり。庭には薔薇が咲き誇り、まるで瑠夏の目覚めを祝福している様だった。

「…急にどうされたのでしょうか、ルカ様」
「気になったから聞いてみただけだよ、ライ」

目の前に置かれているティーカップを、チンと爪で弾く。お行儀が悪いですよと目で訴えると、瑠夏は小さく笑いながらごめんなさいと謝罪する。ライに視線を向ける少女は最早その姿、立ち振る舞い全てが記憶のあった頃の少女ルカと―…ほぼ同じだった。

それこそ正に、血の滲む様な努力のたまものだという事をライは知っている。
目覚めたばかりだというのに、早速本を読み漁り、まるでスポンジが水を吸収するが如く、様々な知識を瞬時に我が物とし、更にはテーブルマナー、達振る舞えさえもライからの助言と証言でここまで再現させてみせたのには、流石に腰を抜かされた。

（…髪の色が、違う）

―それは部屋に置いてあった手鏡を覗きこんだ時に気付いた事。瑠夏の髪の毛は兄と同じ青い色をしており、ここでようやく瑠夏は一つの事実を知る事になる。

?この体は別人の物だ?と。

自分はこんな色の髪ではないし、それに過去の私はこんなに顔立ちが整ってはいない。瑠夏は別の世界で…新たな体を、新たな人生を、手に入れてしてしまったのだ。

試しに本を読んでみれば、一行一句間違えずに記憶できるし、この屋敷をぐるりと一回りすれば、すぐに屋敷の構造図が頭の中で出来上がる。昔の脳であれば、こんなに記憶力は良く無かった。そう感じるまで、数秒と要らなかった。

それからの行動は迅速だった。昔までこの体で生活していた『ルカ』という人物に少しでも近付く為に、その努力を惜しまなかった。それもこれも全ては青い髪をした兄の為に、この家の全てを仕切ってくれているライの為に、彼らの望む人物になろうと、彼女は必至だったのだ。

「ねえ、ライ。お兄ちゃんはどんな人なのか教えてよ」

故にここまでくるのにかかってしまった一ヶ月という時間は無駄ではなかったはずだ。そう思い直すと瑠夏は、否……『ルカ』は、ライにもう一度だけ問う。

「…この国は二つの組織によって治められております」

「…えーと確か…『政府』と『自警団』だよね」

昨晩読んだばかりの本には、確かそう書いてあったはずだとルカは心の中で呟く。

「えぇ。遠い昔までは『王族』が治めていましたが…。彼らの体たらくな政策に、一部の正義感溢れる貴族と平民達は反発しましてね。そこで産まれたのが政府と自警団という組織…」

政府は王族を内側から変える為に、自警団は王族を外側から変える為に、作られた組織だった。武力を持ち立ち上がった二つの組織に王族は慌てたものの、時既に遅し。王族は二つの組織の手によって戦う術を没収され、彼らは祭りごとにしか参加ができない様になってしまった。

「…今でも王族は存在するの？」

「えぇ。ルイ様と非常に親交の深い王子がお一人、それからルイ様の部下にも王子がお一人いらっしゃいますね」

「…随分と平民寄りになったみたいだね」

「えぇ。昔の様に傲慢な方は居ませんよ。彼らは皆祖先の行った過ちを悔い、質素かつ健気な生活を送っていらっしゃいます」

「…へぇ……」

なんだかそれもそれで気の毒な話だと思いながら、ルカは目の前の紅茶を喉に通す。

「けれども…時代が変わり、今度は自警団や政府の中に傲慢な人が現れる様になりました。特に…政府。あそこのトップは傲慢かつ強欲。次々に武力を拡大していき、近隣地域の統治権を自警団から奪う様になりました」

「ちょっと待って。それじゃあこの国って…」
「えぇ。殆どの土地が自警団の手の下にある、という事です。政府は本来国境を警備する為に武力を行使うする組織、自警団は国内を護るために武力を行使する組織ですからね」
「……」
喉に通った紅茶はすっかりぬるくなっていた。
「しかし今ではすっかり政府が掲げる方針が変わりましてね…。今や政府は自警団の天敵。敵対組織にあります」
「…悲しい話だね」
「えぇ。ですがこの話にはまだ続きがあります」
空になったティーカップに再び注がれる紅茶。熱々と湯気が立っている。
「先日、政府の方が自警団にお見えになりまして。要請を求めてきたのですよ」
「要請？」
「えぇ…随分と前から国境沿いでは戦争が絶えませんでしたが、遂に先月、敵国が国境線を越えてこちらに来てしまいましてね。勿論それは政府側の失態。こちらに援軍と協力を求める上で、これ以上自警団の統治権を奪わない、今手元にある統治権は全て自警団に返上するとお約束してくださいました」
「…戦争……」
時折遠くの方で聞こえる大砲の音にルカは、否…『瑠夏』は顔を歪ませる。瑠夏の住んでいた場所には戦争なんて物はなかった。平和という二文字がぴったりな位で、だからこそ…血生臭い話には、慣れていなかった。

「おや、失礼致しました。気分を害された様で」
「ううん、続けて」
再びカップに口をつける。口内に入ってきた紅茶は思ったよりも熱い。
「では続けさせていただきます」
そう言うとライはどこからともなくお菓子の類を出す。それは『ルカ』の好きなアップルパイだ。
「現在政府と自警団は力を合わせて敵国の軍を追い返そうとしています」
「戦況は？」
「五分五分…と言った所でしょうか」
優れないライの表情。ルカはそれを見ると、サクリと…フォークをアップルパイに突き刺した。
「…お兄ちゃんは…自警団のトップなんでしょう？」
「えぇ。代々？レオナルド家？が自警団の長を務めていますからね」
レオナルド家。それはルカとルイの産まれた家柄…。ライの話によると、レオナルドと言えばこの国では超上流貴族に入る、とかなんとか。けれどもルカにとって、ルカ・レオナルドにとってはそんな事、どうでもよかった。
「…どうせ私は一生ここで暮らして行くんでしょう？」
「……」

否定しないという事は、それ即ち肯定の意。

「…とてもつまらない人生だね」

「……そうでしょうか」

「そうだよ。外の世界に行けないなんて、とてもつまらない事だと私は思うよ」

「ですが外の世界には沢山の危険があります。ルカ様はレオナルド家の長女でございます。とても貴重なお方なのですよ」

「それは私が青髪をしているからなの？」

青髪―…。それは神が与えし特別な色。どの国に行っても青髪をしているというだけで、特別な待遇を受ける…？らしい？。

「…何故その事をご存じで」

「本に書いてあったの」

「いやはや…ルカ様はなんでもご存知なのですね」

ふっと小さな笑みを浮かべると、ライは何時に無く真剣な眼差しでこちらを見つめる。

「女性で青髪をお持ちになっているというと…。この国ではルカ様ただ一人。それ故に、外の世界では男性よりも特に目をつけられやすい。言いかえれば…『狙われやすい』という事です」

「……なるほど」

今のライの言葉だと、危険だから、外に出てはいけないのだとい、そういう風に聞こえる。ならば…。

「…私が『魔法』を使える様になったら、少しは外に出してくれる

の？ライ」
「……」
ライは…悲しそうな、切なそうな、そんな表情を顔に浮かばせた。
今のルカでは、その表情の真意を理解する事はできない。けれども、
自分は何か魔法に対して人とは違う物を持っているという事だけは
理解ができた。
それは…ルカの頭の回転力の良さをなめていた、ライの誤算だった。

第五話　兄と魔法

「…私が『魔法』を使える様になったら、少しは外に出してくれるの？ライ」
「……」

この世界での『魔法』の存在意義。それは…自身を守る為、他者を守る為、その為だけに使われる術として存在している。そう本には…書いてあった。

「…駄目です」
「え？」
「ルカ様は魔法を使ってはなりません！」

ガシっと勢いよく掴まれた両手。ライの真剣な眼差しが困惑するルカの瞳を見つめる。

「…駄目なんです。今ここでルカ様が魔法を修得してしまえば、ルイ様にどういう事をされてしまうか…！ルカ様自身の身を守るためにも、絶対に魔法を使ってはなりません！！」
「ちょっと待って！どうしてそこでお兄ちゃんが出てくるの！？」
「…ルカ様」

ライに強く握られている両手が痛い。ライは悲しそうな表情を顔に浮かべてみせた。それは先ほどルカが魔法の話題を出してから…浮かべた表情と、殆ど同じだった。

「…魔法は今や、戦争の道具でしかありません」
「…せ…！」

「お忘れですか、ルイ様が自警団の長であるという事を！戦力が足りていない今、実の妹だとか身内だとか、そんな事を言っていられる程余裕が無い今！ルカ様が魔法を使える様になってしまったら…」

ごくりと、自然と喉が鳴る。

「…ラ…イ…？」

「…戦場に、放り込まれてしまうでしょう」

―ルカの、否『瑠夏』の脳裏に浮かぶのは、優しい兄の姿。いつも日溜まりの様な暖かい笑顔を、言葉をかけてくれた兄。絶望だらけの世界でただ唯一の希望だった、兄。そんな兄が、まさか、そんな事をするはずが…。

「…嘘だ、お兄ちゃんがそんな事…」

「ルイ様は自らの部下が次々と死んでいっている今の状況下で、冷静な判断と余裕を失っています。だからこそ…普段では考えられない様な行動に出ても、おかしくはないのです」

現にルイは『ルカ』を無理矢理目覚めさせて、この底なしの魔力を持つ彼女を戦争に参加させようとしていたのだ。

…けれども、その事実をどうしても伝える気になれず、口ごもるライ。ルカは信じられない様な表情で、ライの事をただただ見つめる事しかできなかった。

―青髪をした兄。笑顔がよく似合う兄。

「…ライ」

「…はい、なんでしょうか」

「手が…痛い」

あ…と小さな呟きが聞こえる。ライは急いで今の今まで握り続けていたルカの手を離した。

「す、すみません！周りが見えていなくて、つい…」

ひりひりと痛む両手。赤い跡がついてしまった両手。

「…ねえ…ライ。お兄ちゃん、今いっぱい傷ついてるの？」

「え？」

心にぽっかりと開いた穴。それはどんな傷よりも痛いという事を、ルカは、否『瑠夏』は知っていた。兄一人死んでしまうだけでもあれほどの苦しさを味わうというのに、兄は、部下が死んでいくという状況下の中で、もっともっと酷い苦しみの中に居るのだろうか。

「……」

『瑠夏』は運が良かったのだ。見た事のない世界で目を覚めて、もう二度と会えないと思っていた兄と再会できて、心に空いてしまった穴は今塞がりかけている。

「…私……」

けれども兄は一生治る事の、塞がる事のない穴を抱えながら、戦っているというのか。国境を越えてきた敵国の軍と。毎日毎日毎日。

「…ルカ様…？」

「…ううん、なんでもない。」

『ルカ』は笑みを浮かべる。先ほどから手つかずのアップルパイに再び視線を戻すと、先の方をフォークで綺麗に切り、口元へ運ぶ。甘い甘い甘ったるい味。それはまさに今の自分を指している様で…どうにも腹が立った。

「…やっぱりアップルパイ、いいや」

「おや、珍しい。お気に召しませんでしたか？」

「…うん、なんていうか…。今は甘くない物が食べたい気分なの」

そう言うと、ルカは椅子から立ち上がる。

「どこに行かれるおつもりで？」

「図書室。少し勉強してくるね」

「…本当にルカ様は、非常に勤勉家でいらっしゃいますねぇ…ルイ様にも見習ってほしいです」

小さなため息が零れる。そんなライの様子に自然と小さな笑みが浮かぶ。

「今日は自警団に行かなくていいの？」

「…そうですね、もうそろそろ書類も溜まってきている頃ですし、久しぶりに顔を出しに行きましょうか」

「そっか…行く時は一言声をかけてね？」

「えぇ、ルカ様のお好きな紅茶を片手に参りますよ」

どこまでも気がきく執事にルカは感嘆のため息をつくと、よろしくねと声をかけてその場を去る。向かう場所は勿論図書室。大量の書物が貯蔵されている、記憶力のいいルカにとっては非常に好きな場所。

「…魔法、魔法入門書……」

そして今から勉強するのは、魔法に関しての知識。

「……」

どうしても、駄目なのだ。兄が一人で全てを背負って傷ついているという事実が、辛くて、悲しくて。自分が魔法を修得して一人でも多く兄の部下を守れれば、一人でも多くの敵を殲滅できれば、兄の重荷は減る。きっとそうだと己に言い聞かせると、ルカは目の前に広がる本棚を見つめる。

―これから自分が勉強する事は、人殺しの術だという事を理解したうえで、ルカは冷静に今の事態を分析する。

それは兄が両親から継がなかった、レオナルド家当主として、人の上に立つ者として、必要な才能だった。

第六話　召喚魔法

『召喚魔法入門書』

数ある魔法入門書の中でもまず最初にルカの目についたのは、召喚魔法に関しての教科書だった。パラパラとページをめくると、所々に赤いチェックが入っていて、どうやら誰かが使った様な跡があった。しかしレオナルド家の図書室にあったという事は、きっとレオナルド家の関係者の誰かが…使ったのだろう。ルカはその使い古された教科書を手に、裏庭へと足を進めた。

『召喚魔法その壱
己の魔力を壱(一万)〇〇〇〇ルル捧げる事で、召喚獣を召喚する事ができる。呪文は以下の通り。

地の底より出でし精霊よ。我の魔力壱〇〇〇〇ルルと引き替えに、地の底よりケルベロスを使役する権利を得。汝、我の声に応えよ』

ルルというのは、魔力を数える時に使われる単位だったと本には書いてあったはずだ。しかし…ルカはまだ、壱ルルがどの位の量を指すのかという事さえも知らなかったが。

「えーと……『地の底より出でし精霊よ』」

人間の体内を巡る魔力には？平均値？という物がある。成人男性なら約七〇〇〇ルル、成人女性なら約六〇〇〇ルルが平均だと世間では言われている。

「『我の魔力壱〇〇〇〇ルルと引き替えに、地の底よりケルベロス

を使役する権利を得』」

もうお分かりだろうが、普通の人間が召喚魔法を使うとなると、それ相応の人数が必要となるのだ。

「『汝、我の声に応えよ』」

しかしこの入門書には致命的な知識が抜けていた。それ故に、ルカはこの召喚魔法をたった一人で、使う事になんの躊躇いも持っていなかった。

そして呪文を言い終わるのとほぼ同時に、ルカの目の前には丸い何も書かれていない魔法陣が浮かぶ。そこにようやく赤黒い色をした複雑な文字の羅列が浮かびあがり、文字の色同様の赤黒い光が辺り一帯を包み込む。

「ガウウウゥゥ……」

「…え…？」

そしてようやく光が納まると、魔法陣の色には禍々しいオーラを放つ、三つの頭を持つ怪物が悠々と立っていた。

「す…凄い…！」

禍々しいオーラを放つケルベロスは、流石召喚獣と言った所だろうか。ルカの想像を遥かに超える物を持っていた。

「貴方…私の言っている事が分かる？」

「ガルル……」

手を差し伸べると、三つの頭の中でも真ん中に位置する頭が、ルカの手に優しく頬ずりをする。見た目とは裏腹にケルベロスはとても穏やかな気性の持ち主だと判断すると、ルカは優しくケルベロスの背を、頭を、次々と撫でる。

「ウウウゥ……」

ケルベロスも徐々に警戒心を解き、暫くすると三つの頭全てがルカに頬ずりをしようとして、色々と大変な事になった。

「ちょ、ちょっと！体は一つしかないんだからそんな事したら…あはは、くすぐったい、話の途中で舐めないでよ…！」

ひとしきりじゃれ合いをすると、ルカはケルベロスから教科書へと視線を移す。

『ケルベロスについて。
機動力は素晴らしいものの防御力にかける。ケルベロスには人々の怨念を吸収するとう性質があり、戦場に連れていくと味方と敵両方から怨念を吸収し、その怨念の量によって攻撃力が左右される』

…なんだか物騒な事が書いてあり、ルカは冷や汗を流す。例えどんなに気性が穏やかと言えども、彼ら召喚獣の本質は人を倒す為に存在するという事を、ルカはすっかり忘れていたのだ。

『尚、召喚獣に定期的に魔力を送らないと、すぐに元に居た場所へ帰ってしまうので注意する事』

最後の一文に、思わず驚きの声が漏れる。そうこうしている内に、ケルベロスの体は次第に消えていき、遂には魔法陣さえも消えてし

まった。

「…居なくなっちゃった」

裏庭にはルカただ一人が残り、教科書のページが風に揺れてパラパラと音を立てて勝手にめくられる。その音さえなんだか虚しくて、ルカは視線を落とす。

「…でも思ってたよりも簡単に、召喚獣って呼びだせるんだね」

壱〇〇〇〇という数字に警戒していたものの、体は元気そのものだった。それはルカが『底なしの魔力を持つ者』だからなのだが…その事実を知らないルカは能天気にそんな事を考えるのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6388z/

魔術師ルカの一生

2011年12月25日13時48分発行